

ガネフォに感謝

ガネフォ水球

村上(本郷)順三 (80歳)

(成城大学出身)

私の人生(満80歳)を振り返ってみた時、最初の試練は会社に入社した2年目(満24歳)でガネフォに出場した時の事であります。その時の経験・体験が、その後の私を大きく育ててくれて、今の私があると信じています。

何といっても当時の日本水泳連盟の方針に従わず、日本国の本音と頭山立國氏(慶応大学 東南アジア学友会代表)の考えに賛同したこと、日本とインドネシアの友好を重んじ、日本の将来のため、そして翌年開催の「東京オリンピックの成功」を願い、ガネフォに出場したあの時のエネルギーが、私のその後の人生に大きく影響していると思っています。

「何事も志を持って自分なりに努力すれば、結果は必ず付いて来る」

と言う事をガネフォ出場から教わりました。そして、その事を心に抱きその後60年間の人生に於いて、自分なりに努力してきた結果が、今の私であるとガネフォへ出場した事に感謝しています。そのガネフォ出場当時の事を思い出しながら筆を執りました。

1、ガネフォ出場の経緯

ガネフォ(GANEF O)とは「新興国スポーツ大会」の事であります。当時、I O C(国際オリンピック委員会)を脱退したインドネシア(スカルノ大統領)がI O Cに加盟していない中国と共にオリンピックに対抗し、開催したスポーツ大会で、インドネシアの首都ジャカルタに於て世界51か国2,700人が参加した国際スポーツの大イベントであります。その後、ガネフォの地域大会として「アジアガネフォ」が1966年にカンボジアのプノンペンで開催されましたが、その後「スカルノ大統領の失脚」「中国の文化大革命」によってガネフォはこの2回だけで、あとは自然消滅してしまいました。

当時、インドネシアは国際水泳連盟からも除名されていました。国際水連の規則には「国際水連に加盟してない国と試合することはできない」となっており、インドネシアも中国も加盟してない為、日本水泳連盟としてはガネフォに参加しないことを表明していました。

一方、アジア・アフリカの新興国は、日本がガネフォに参加する事を期待しており、もしも、日本がガネフォに参加しないのなら、翌年開催予定の「第18回東京オリンピック」をボイコットすると宣言しました。そのような状況下に於いて立ち上がったのが頭山立國氏であります。

頭山立國氏は、「インドネシアと日本国との関係を良好なものにしたい」と考えており、出来るだけ多くの日本選手の参加を願っておりました。そこで頭山氏は、慶應義塾中等部の頃から共に学んできた、旧友の井形敦氏（慶応大学水球部OB）に日本水球選手の派遣について相談されたのです。その時、井形氏と共に慶応大学水球部で井形氏の4年先輩にあたる山本健氏（成城学園高校から慶応大学へ進学し、ローマオリンピックに出場したゴールキーパー）も同席され一緒にガネフォの話が聞かれました。

そこで井形氏・山本氏の両名は、日本から水球チームを参加させることができるのかどうかを社会人水球チームの「58クラブ」（関東大学一部リーグのOBで結成。翌年の東京オリンピックの候補選手が何人も在籍している、日本水球会のトップレベルの社会人チーム）に相談を持ち掛けました。

すると58クラブ内で検討が始まり、翌年の東京オリンピックに出場する候補選手を除いた「クラブ内の次の選手を中心」にチームを編成することになりました。

2、ガネフォ水球チームの結成

58クラブ内から出場選手の選考にあたり中央大学出身・菅久尚武氏、日本大学出身・内田啓一氏を中心に行われ、中央大出身4名、日本大出身3名、成城大出身2名、法政大出身2名、慶応大出身1名の12名が選ばれました。しかし、その後慶応大は、OBからの強烈な圧力（当時、日本水泳連盟の水球委員長は、慶応大OBのN氏でした）により井形氏から出場できなくなるかもしれないとの話が浮上。ガネフォ出場の話を持って来て下さった井形氏が出場出来なくなるのはとても残念に思いましたが、当時の状況（慶応大OBから井形氏の勤務している会社（Y社）を経由して圧力があつた）を考えた場合欠場の選択もありうるかもしれないと思いました。（なお、慶応大OBの山本健氏は、最初からOBの圧力をキャッチしており、ガネフォに出場できないとの事で陰に回って我々を応援して下さいました。）

私は「もしも井形さんが欠場となった場合、ゴールキーパーが二人とも居なくなり、これではチームが編成できなく成る」と思いました。

その時、私の頭に真っ先に浮かんだのが京都・山城高校時代一緒にプレーした1年後輩の「房野康滋さん」でした。

房野さんは、山城高校を卒業後、日本大学に進学し日本一にもなり、海外試合

の経験もありましたので「彼に勝るキーパーは居ない」と思いました。そこで、早速、房野さんへ電話して「ガネフォ」という大会の話を説明して出場を依頼した所、こころよく了承してくれました。

これで井形さんが万一出場できなくなった場合の準備は整いました。その後、何日かして井形さんから「どうしても行けなくなった」との連絡があり、残念ながら井形さんのガネフォ出場は成りませんでした。

3、日本水泳連盟に脱退届を提出

ガネフォ出場選手が最終決定したところで、クラブ名を新しく12名だけで「東京クラブ」を結成。日本の代表でないこともPRしてガネフォへ出場する事



にしました。また、我々12名が日本水泳連盟に所属している状態でガネフォに出場した場合、“日本水泳連盟に迷惑がかかるといけない”と言う事で、私が毛筆で「脱退届」を書き、菅久キャプテンに託しました。

(当時、新聞報道で13名と書かれたものもありますが、井形さんを外して提出していますので、正しくは12名です。)

それにもかかわらず、日本水泳連盟は我々の提出した脱退届は受理せず、ガネフォ出場選手に対しアマチュア資格をはく奪し「永久除名」という処分を下しました。また、当時水球委員の3名(菅久、村川、中山)も水球委員を直ちに除名されました。

この事で我々12名は、チーム結成時より一層団結する事になり、固い絆で結ばれるようになりました。あれから55年が過ぎた今でもお互いに強く結ばれているのは、このような理由からでもあります。

なお、ガネフォ開催から9年後の1972年(昭和47年)9月に日本(田中角栄)と中国(周恩来)の間で日中国交正常化が結ばれた事で、我々は日本水泳連盟に全員(12名)復帰する事となりました。

このほど私たちはインドネシア共和国から新興国競技大会に個人招待を受けました。 われわれは日本の未来のためまたスポーツを通じて世界親善のために役立つことと信じあくまで個人の資格で参加するつもりであります。 つきましては日本水泳連盟には今後いっさいのご迷惑をおかけしないよう、ここに脱退届を提出します。	脱退届
---	-----

4、ガネフォへの出発準備

ガネフォ出場の水球選手12名が決まってから出発までの期間は、そう長くはありませんでした。(2週間ぐらい) 11月2日の第1陣出発までの間に、大会出場への準備(日の丸入りの水泳パンツや水球チームのユニフォームを選手の寸法に合わせて誂える)をせねばならないし、また国内で水球の練習もしなければなりませんでした。

私は会社に入って間もない若手社員ですから会社業務は通常どおり17時まで勤務し、その後、ガネフォの準備・連絡等を行わねばなりませんでした。

日本水泳連盟は当然協力してくれないし、先輩や後輩にも協力を頼めない中助けて下さったのが、ガネフォの話をもっと早く持って来て下さった山本健様(当時アサヒビール勤務、ローマオリンピックのゴールキーパー)でした。山本健様は、練馬区にアパートの一室を借りて下さり「ここを使いなさい」と我々に無償で提供して下さいました。(我々に資金がないのを知っておられ、ご自分の負担で提供)そのお蔭で出場選手の皆が一同に集まる場所が出来て、ガネフォ出場の為の準備がスムーズに行くようになりました。また、一致団結する事も出来ました。山本健様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

『その節は、本当にありがとうございました。』

当時、東京都内にある温水プールは、東京大学の地下温水プール(25m)と昭和33年(1958年)の第3回アジア大会が開催された東京都立体育館の屋内プール(50m)の2か所だけ。もちろんそのプールの使用は、水連からの手が回っており、我々には使用させてくれませんでした。

そこで、成城大学時代に合宿練習をした伊豆河津、峰温泉の菊水旅館の温泉プール(25m)をお借りして5日間の合宿練習を計画し、実施しました。このプールは、水深が浅く足が着くため水球には向きませんが、体力維持のための練習にはなりました。

ガネフォ出発の前夜(11月1日の夜)、芝の旅館に水球選手12名が全員集まり、翌日の出発に不備が無いように、準備に万全を期しました。その時、ガネフォ水球チーム結成前まで一緒に練習して来た「58クラブ」の人達が、激励の為に旅館へ来て下さったのは、本当に嬉しかったことを覚えています。

ガネフォ出場に際し、いろいろな事で苦労したことは、その後の私の人生に於いて良い出来事だったと思っています。今ではガネフォに出場した事に感謝しています。